

保健師 最前線

“facilitator” に込めた熱い思い

宮津市
ひろし
が
佐賀 弘 さん



「その時、その時で自分の役割を変えながら、相手方の立場を考慮し相手の能力を十二分に引き出すファシリテーター(facilitator)の人間として仕事をしたかったんです。訥々としたしゃべり方ではあるが、冒頭から胸に秘めた熱い思いを語ってくれた。

大学卒業後、フリーピンで少数民族を支援するNGO活動に参加。日本に戻り岡山県の農家に住み込んだ後、国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊に応募し、パプアニューギニアで2年、農業支援に携わった。そんなある時、現地のJICA職員から「看護師に向いているのでは」と思わぬアドバイスを受け、帰国後、神戸大学医学部保健学科に入学した。「そのころは看護師という専門職で、途上国でまた働きたいと思っていたんです。ところが学ぶうちに保健師という仕事がある、現地に赴いて地域の人たちのニーズをくみとる途上国支援とよく似ている部分もあることに気付きました」

一見「回り道」とも思えるような体験を重ね、宮津市の保健師になって3年目である。「今は業務をこなすだけで手いっぱいなんです。最近、特定健診の受診率の低い担当地域に出かけ健診の呼びかけをしたんです。すると、『わざわざ来てくれたんやから』健診の大切さがよく分かった」と言って、5人が健診の申し込みをしてくれたという。「地域に出かけてこそ味わえる保健師の面白さを、あらためて現場で教え

てもらいました」

自宅を訪れる赤ちゃん訪問を一度断られたことがあるが、男性保健師ということに特に意識したことはないという。「私にも2歳の子どもがおり、お父さんの立場からも意見が言えますし。それに姉二人の中で育ちましたから、おしゃべりも好きなんです」と笑った。

丹後地方の同期の保健師5人ぐらいが2、3カ月に1回集まり、食事会などをするのが息抜きでもあり楽しみだと話す。「仕事のことも分かりあえますし、お互いに刺激しあっています」。最後に「将来の保健師像は」と尋ねてみた。「保健師としてだけでなく人と人をつなぐファシリテーターとして、人の力や地域の良さを引き出し、自分が住む地域を生き生きとさせたいんです」。「facilitator」という言葉に佐賀さんの「志」を感じた。

